

哲学歴史学科 世界史コース

イザーク・ティツィングによる
日本文化についての記述とその受容
19 世紀初頭イギリスの書評を手掛かりに

文学部 2025 年度

ABA22150

いとう みお
伊藤美桜

目次

はじめに	1
1. イザーク・ティツィングについて	2
1-1. ティツィングの経歴	2
1-2. 日本人との交流	3
2. ティツィングの著作	4
2-1. 出版されたもの	4
2-2. <i>Illustrations of Japan</i> (『日本風俗図誌』) についての基本的な情報	5
2-3. <i>Illustrations of Japan</i> の分析	7
3. ティツィングの著作への評価	13
3-1. 19 世紀初頭イギリスの日本への関心	13
3-2. 19 世紀初頭イギリスにおける読者	14
3-3. 書評からみる評価	17
3-4. 書評の内容の分析	21
おわりに	22
参考文献	23

はじめに

イザーク・ティツィング (Issac Titsingh, 1745–1812) は 18 世紀後半、オランダ東インド会社 (Verenigde Oostindische Compagnie) の日本商館に商館長として勤務した人物である。商館長の業務の傍ら、阿蘭陀通詞をはじめとした日本人との積極的な交流をもち、日本の風俗や歴史についての書籍を集めた。東インド会社職員としての赴任期間の終了後、ヨーロッパに戻ってから日本でも集めた資料の翻訳や編纂を進め、出版を目指した。ティツィングはその志半ばで逝去したが、彼の遺稿はほかの編集者の手に渡り、複数の本として出版されている。そのうち、本論文では *Illustrations of Japan* という作品を扱う。この本は主に日本の歴史に関する前半部分と、日本の結婚および葬儀に関する後半部分に分かれている。

ティツィングは、東洋学者、日本学者として評価されており¹、近年ではレクインの調査によって多くの史料が発見され、より具体的な姿が明らかにされた²。また、松井³や木村⁴によって、日本史記述についてのティツィング自身の構想や出版物の受容に関する研究がなされている。これらの先行研究は、日本の書物の内容やティツィングの著作を読んだ外交官などが書き残したものを参照し、主に日本の書物に基づく内容をティツィングがどう取捨選択しまとめたのか、またそれらがどのように受容されたのかについて述べている。これに対し本論文では、ティツィングの経験した内容を含む日本文化に関する記述に着目し、それがどのように受容され、評価されたのかについて、イギリスの書評をもとに検討する。特に、ティツィングが目指した日本文化の記述が、想定する読者層の変化に伴う編集の工夫によってどのような影響を受けたのかについて注目する。

第一章ではティツィング自身についての説明を行う。第二章では彼の著作である *Illustrations of Japan* についての説明と、その中でティツィングがどのように日本の文化を伝えようとしていたのかについて考察する。また、彼の遺稿を手にした編集者たちがどのような意図をもって出版しようとしたのかについても検討する。第三章ではイギリスの書評誌での記述をもとに、*Illustrations of Japan* についての評価を考察し、ティツィングの著作がどのように受容されたのかについて検討する。

1. イザーク・ティツィングについて

1-1. ティツィングの経歴

ティツィングは1745年1月、オランダのアムステルダムにて父アルベルツス・ティツィング（Albertus Titsingh）と母カタリナ・ビッター（Catharina Bitter）の間に生まれた⁵。一族の中には複数の著名な医師がおり、アルベルツスもまたよく知られた外科医であったという。ティツィング自身も1764年、アムステルダムの大学で医学を学んでいる。しかし、詳細は不明であるが翌年にはライデン大学にて法学の博士号を取得している。1766年にオランダ東インド会社に入社し、下級商務員として勤務を始めた。1779年には上級商務員となり、商館長として日本商館への赴任を命じられた⁶。

1779年当時、日蘭貿易は船の難破が短期間のうちに相次いだことなどの複数の要因によって非常に低迷しており、損失を伴いつつ行われているような状況であった。1826年から1830年にかけてティツィングと同じく日本商館長を務めたメイラン（Germain Felix Meijlan）は、著書の中でこの時期の日本商館長にティツィングが任命されたことについて、「抜群の博識に加え、優れた洞察力、大きな人間的魅力に加え同時に不屈の人格を持った人物であったので、彼は、この任務にもとびぬけて適していると考えられた⁷」と述べている。ティツィングの任期は、第1期は1779-1780年、第2期は1781-1783年、第3期は1784年である。第2期はアメリカ独立運動に際してオランダが海上中立同盟に加盟したことでイギリスとの関係が悪化し、本国から日本へ船を廻す準備ができなかったため特に長い⁸。ティツィングはこれを利用し、日本がオランダ東インド会社にとって不利な条件で貿易することを求め続けた結果としてオランダ本国が船の派遣を拒否したのだと伝えることで、日本との交渉を有利に進めた。これを機に私欲を優先した奉行の振る舞いや厳しい取引内容に目が向けられるようになり、当時の奉行の失脚や条件の改善への交渉が進められるようになった。そしてティツィングは日本に対してオランダ東インド会社の商品の値上げへの合意を取り付けることに成功した⁹。こういった点から、彼は経済的な面でも評価されている。

ティツィングは、オランダ東インド会社日本商館長としての任期を終えるとベンガルのチンスラに赴任し、1792年によく本国へ帰国した。しかし1794年にはオランダの大使として清へ赴任することになる。任期を終え1796年に帰国となるが、本国の情勢の不安定さからオランダではなくロンドンへ住むこととなる。1801年に一旦オランダに帰るがすぐにパリに移り、そこで日本で収集したものをまとめ、出版するために準備をしていたが、戦

争の余波による国内の混乱などの要因もあり、なかなか出版に至らず、1812 年に没した。風邪が死因とされており、普通は死ぬようなものではなく彼自身もそう考えていたために、収集品や手稿などの死後の取り扱いがまとまっていないままになってしまったと考えられている¹⁰。

1-2. 日本人との交流

ティツィングは日本滞在中、阿蘭陀通詞をはじめとした日本人との交流を持っていた。当時オランダ人は長崎の出島にのみ滞在を許されていて、自由にその外に出ることはできなかった。しかし、出島には「日用や大工、番人など予想外にも多くの下層民が、出島に出入りして暮らしている¹¹」状況であったことが分かっている。実際にティツィングの書簡の中にも日本滞在中にかかわりのあった使用人や遊女の名前が登場する。また、丹波国福知山藩主朽木昌綱（1750–1802）とも頻繁に手紙のやり取りをしていたことも分かっている。昌綱は前野良沢に師事して大槻玄沢らとともに蘭学を学んだ人物で、当時の大名随一の蘭学者であった¹²。

朽木らとの交流はティツィングが日本商館を離れたあともなお続いた。通詞たちと朽木がオランダ語で書いた手紙をティツィングが添削して返したり、家紋の入った更紗や外国の貨幣などの贈り物をしたりといったやり取りが書簡から確認できる。ティツィングの方からは日本の歴史などについての資料を送ることやその内容への質問に答えることを求めている。日本で寛政の改革が始まって貿易抑制政策がとられたことや、1796 年以降のヨーロッパの混乱など、交流が妨げられることも多かったが、20 年以上にわたって書簡がやりとりされていた。ティツィングの著作にはこの交流によって得られた日本の資料やその翻訳が多く用いられている。

2. ティツィングの著作

2-1. 出版されたもの

ティツィングによる論文及び刊行された著作は次の七点である。書誌情報等は松井の整理¹³に依拠し、各邦題は沼田¹⁴によるものを用いている。

- 「酒の醸造及び醤油の醸造」
Bereiding van de Sacki. Idem van de Soija (*Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen*. Deel 3, Batavia 1781 に掲載) (蘭語)
- 「蝦夷志」
Description de la Terre Yeso traduite du Japonaise par M. T. (*Annales des Voyages*. Vol. XXIV, Paris 1814 に掲載) (仏語)
- 『日本における結婚と葬儀の式典』
Cérémonies usitées au Japon pour les Mariages et les Funérailles. A. Nepveu 刊行 (Paris 1819) (仏語)
- 『歴代将軍譜』
Mémoires et Anecdotes sur la dynastie régnante des Djogouns, souverains du Japon. Publié avec des Notes et Éclaircissemens par Abel Rémusat. A. Nepveu 刊行 (Paris 1820) (仏語)
- 『日本風俗図誌』
Illustrations of Japan. Translated from the French, by Frederic Shoberl. R. Ackermann 刊行 (London 1822) (英語)
- 『日本の諸特徴』
Bijzonderheden over Japan. de Weduwe J. Allart 刊行 (‘s-Gravenhage 1824-1825) (蘭語)
- 『日本王代一覧』
Nipon O Dai Itsi ran, ou Annales des Empereurs du Japon. par M. J. Klaproth. (Paris/London 1834) (仏語)

「酒の醸造及び醤油の醸造」はティツィングの存命中に唯一世に出された論著である。松井によると、酒と醤油の製法と使用についての記述に加え、日本の貨幣についての記述といくつかのオランダ語と日本語の対照表が含まれるという¹⁵。『蝦夷志』は新井白石による同題の書物の翻訳である¹⁶。『日本における結婚と葬儀の式典』、『歴代将軍譜』および『日本風俗図誌』については後述するため省略する。『日本の諸特徴』は『日本風俗図誌』からの重訳

で、オランダ人の関心に基づいて再編集されている。『日本王代一覧』は林春斎の『日本王代一覧』を翻訳したもので、冒頭に朽木昌綱宛の献辞が置かれる¹⁷。

ティツィングが日本を離れたあと、先述した日本人との書簡のやり取りの中に、日本史に関する書物の翻訳を依頼する内容が確認できる。日本の風俗に関する書物の翻訳を依頼する内容は見て取れず、日本滞在中に翻訳が完了していたと考えられる。このことからティツィングは当時の風俗から遡って歴史に関心を持つようになったのではないかとの指摘がなされている¹⁸。

2-2. *Illustrations of Japan* (『日本風俗図誌』) についての基本的な情報

本論文ではティツィングの遺稿の中から出版されたもののうち、『日本風俗図誌』を取り上げる。ティツィングの著作は日本の書物を翻訳した内容が多い中、彼自身の日本での経験が書かれたものであり、彼の日本文化への考えや向き合い方を検討するために最も適していると考えからである。なお、のちに出版される日本語版との混同を避けるため、以降は *Illustrations of Japan* と表記する。

本書はティツィングの死後、生前から親交のあったパリの出版者ヌヴーの手によってフランス語で出版された『日本における結婚と葬儀の式典』、『歴代将軍譜』を英訳し1冊にまとめたものである。刊行は1822年、翻訳はロンドンの編集者であるショバール (Frederic Shoberl, 1775-1853)¹⁹による。

この英語版からはオランダ語版と日本語版が作成されている。日本語版は沼田次郎によって翻訳され、1970年に『日本風俗図誌』として出版された。本論文でもこの沼田訳を参照している。

次に『歴代将軍譜』と『日本における結婚と葬儀の式典』それぞれの内容について説明する。『歴代将軍譜』は1600年以降の日本の歴史や宮中での儀式について述べたものである。生前のティツィングと親交のあったフランスの東洋学者であるアベル・レミュザ (Jean Pierre Abel Remusat, 1788-1832) が注釈をつけている²⁰。『歴代将軍譜』の記述のうち、八代将軍吉宗と九代将軍家重にまつわる内容については、講釈師である馬場文耕 (1718-1758)²¹の著作のうち『近代公実厳秘録』(1754)と『当時珍説要秘録』(1756)が底本にされていることが木村²²の研究によって明らかにされている。また、先述したようにティツィングは日本を離

れてからも日本についての情報を書簡によって得ており、最新の政治情勢についても熱心に求めていた。日本にいるオランダ東インド会社の職員からの報告もまた役立っており、1792年の島原噴火についての記述はそれをもとにして書かれたとされる²³。彼は最新の情報を更新し続けようとしていたが、情勢の悪さと彼自身の死によって途絶えてしまう。遺稿が出版に至るころ、その当時実際に日本に滞在して調査を行っていたシーボルトがその成果を発表し、人々の関心はそちらへ向くこととなった。木村はティツィングの著作について、日本理解のための参考書として19世紀後半まで読まれていた一方、シーボルトの歴史記述と比較して包括的でないという見方もあったと述べている²⁴。

『日本における結婚と葬儀の式典』の結婚に関する部分については『嫁取重宝記』及び『当世民用婚礼仕用罌粟袋』が底本になっているとされる。沼田によって『当世民用婚礼仕用罌粟袋』を底本とした部分は補足や注釈はあるものの、挿絵を含め底本に忠実な内容になっていることが確認されている²⁵。また、それら書物の図版も含めて掲載されているため、視覚的に日本の情報を知るための貴重な資料となっている。葬儀の部分については底本が明らかになっていないものの、ティツィングが実際に日本人から聞いた話や、江戸参府の際に通った村落などで見聞きした話が多く含まれると考えられている²⁶。

ティツィング自身が体験した内容として、死体を埋葬する際に用いる「土砂」と呼ばれる粉についての記述がある。「土砂」とは、真言宗の僧侶によって祈祷された砂を指し、それは真言宗が独占して販売する権利を有すると述べられている。死体を棺桶に入れる際に使用され、「土砂」を死体の耳、鼻、口に入れるとすぐに体が柔らかくなる効果を持つという。当時の日本では小さな桶のようなものに遺体を入れて埋葬するが、その際硬直したかたい体を無理なく曲げるために用いられていたとのことである。また、眼病の改善、精神や肉体に元気を与える効果などもあると述べられている²⁷。

この「土砂」についての詳細は明らかでない。しかし、1708年に蓮體によって書かれた光明真言の注釈書である『光明真言金壺集』²⁸にも同様の「土砂」の効果が「(前略)死骸の強ばりたるに、此〔筆者注：土砂〕を灑れば柔になりて、活たる人の如くになること、皆光明に照されて、罪を滅するの験しなり²⁹」と記されている。*Illustrations of Japan* での「土砂」の記述はティツィングが日本人から聞いた話として書かれているが、こういった書物からも情報を得ていた可能性がある。また、ティツィングの滞在から80年ほど後になるが、1859年から1860年にイギリスの長崎領事事務扱いとして来日したホジソン（Christopher Pemberton Hodgson, 1821-1865）は著作の中で以下のように述べている。

骸が十分に柔らかくなるよう、有名な「土砂」 Dosio [土砂加持をした砂、この土砂を硬直した死体にまけば、真言の力によって柔軟になるという] が死につつあるか、もしくは死の直後耳の中に注がれる。(中略) この粉は誠に微妙な性質をもち、その効き目は靈験あらたかで即効性があり、ヘラクレス Hercules [ギリシア神話の怪力の神] のような巨大な体でも、死んだらどんな場所にも折りたたむことができるということだ。(中略) この「土砂」すなわち粉末は神秘的なもので、僧侶が儲けるために売っていると私は思う³⁰。

私がすでに述べた「土砂」につき、最も賢明な医者にもその効き目はどれほどあるかと質問した。しかし僧侶は医者とのライバルである。というのは、日本の僧侶は準医師で、よく医者の代わりに病を魔法をかけて追い払うために呼ばれるということを思い出されたい。「小銭」すなわち「サベック」が医師のところではなく、仏陀のところへ行くから、医師は坊主の声を当然払うべき敬虔な感動をもっていつも聞くとは限らない。

(中略)

もちろん、やぶ医者には日本にいる。彼らは土砂の販売業者から手厚く保護されている。まじない師と祈祷師が「薬物」をきよめる³¹。

こういった記述から、長崎で葬儀の際に真言宗の「土砂」を用いる文化が根付いていたことは事実であろう。

光明真言の日本の書物に基づき忠実な翻訳を目指した部分ではなく、この「土砂」というティツィング自身が日本人との交流の中で知り、実際に体験したことについての記述に注目することで、彼の日本文化の捉え方を考察することができると思う。

2-3. *Illustrations of Japan* の分析

ティツィングの著作である *Illustrations of Japan* は、彼の遺稿に編集、翻訳を重ねたものである。それによって、本来彼が意図していたものとは異なる形で世に出たと指摘されている³²。したがって、本書の分析にはティツィング自身がどういった内容にしようとしていた

のかに加え、編集者たちがどのような伝え方をしようとしたのかという視点が必要だろう。

まず、ティツィング自身がどのような内容にしようとしていたかについて考察する。歴史に関する部分については木村³³、松井³⁴及び松方³⁵が詳しい分析を行っているため、本論文では「土砂」についての記述から、彼が文化的なことについてどのように向き合っていたのかを考える。ティツィングは「土砂」が遺体にもたらす影響について、はじめは非常に懐疑的であった。

彼らが私の目の前でこの実験を実行すると約束したので、私は、実際われわれのとうてい考え及ばないようなことであるが、さりとて、はじめのうちはとうてい信用できないかに見えた、あの最近発見された流電気という現象によって合理的な説明ができるかもしれない事実を、一概に荒唐無稽な作り話だと非難することになってもいけないので、一時真偽の判断を下すことを中止するよりほかにどうしようもなかった³⁶。

以上の記述からは、話を聞く限りではにわかには信じがたい内容であったが、自分の目で見るとまでは虚偽だと決めつけないようにする慎重な姿勢が見て取れる。

その後通詞を通じてその「土砂」を入手したティツィングは、1783年10月、亡くなったオランダ人商館員の遺体を用いた実験を行った。ティツィングの記録によると、「土砂」を遺体の耳、鼻、口に入れると、その効果があるいはほかの何かの作用か分からないが、木片のごとく固くなっていた遺体が20分もしないうちに柔らかさを取り戻したという。また、粉自体を観察したところ、ドイツの「不老長寿の薬」と類似したものであるとの推測もしているが、詳細は不明である³⁷。

実際に自分の手で実験したことにより、ティツィングは「土砂」の効果を確信したと思われる。とはいえ、1791年2月17日付の朽木昌綱宛ティツィング書翰には

私は土砂という砂の詳細な記述をお願いします。(中略) ヨーロッパにおいて、人々はこの話を馬鹿にして、信じようとしませんが、私はそれを疑っていません。しかし、死体軟化には、なにか別のものが必要だった、それを通詞たちは私に隠していたということは、ありうるでしょう。これについてヨーロッパにおいて、あらゆる可能な説明を行なえるために、私は閣下[朽木昌綱]に是非詳しい報告をお願いします。私はそれに一番重点を置いているのですから³⁸。

とある。ここから、死体を軟化させるという結果が「土砂」によるものでない可能性も考慮していることが分かる。土砂加持という文化と科学的な効果のそれぞれに着目して記述を試みていたといえるのではないだろうか。ティツィングは「土砂」という日本の宗教的な儀式とその効果について、非科学的な異国の文化だと結論付けることなく、科学的に向き合い、正しい記述を行おうと試みていたことが分かる。

また、1809年10月10日付ウィリアム・マースデン（William Marsden, 1754-1836）宛ティツィング書状では、自らが日本についての情報をヨーロッパ人に伝えるということについて次のように述べている。マースデンはイギリスの東洋学者で、東インド会社に入社してスマトラに赴任（1770-1779）していた。帰国後は海軍省に入り書記を務めた人物³⁹で、ティツィングとたびたび書簡のやり取りをしていた。

日本人の起源が含まれているところの黒い雲にもかかわらず、さまざまなきごとが漸進的に詳細となることは、今も広く行われている習慣に光をさしかけ、我々の近代帝国がまだ無名で、極めて未開な状態に浸っているときに、彼らがすでに文明化され啓蒙された国民であったことを十分に証明します。[中略] 現在は、ヨーロッパ中に私以外に、そこで、あらゆる点で知られるべきでありながら全く知られていない国について、かくも豊かで信頼するに足る詳細を提供できる者はいない、ということは事実です⁴⁰。

ここから、ティツィングには日本についての正しい情報を有しているという自負があり、それをヨーロッパに伝えるべきだという意味がうかがえる。

では、そういった思いをもって編纂された彼の遺稿を手にした編集者たちは、彼によって書かれた内容についてどのような価値を見出し、どのように伝えようとしていたのか。ティツィングの遺稿をはじめにまとめて出版したフランスの出版者ヌヴェーは、刊行に際して先述のマースデン宛書簡の内容の一部に若干の改変を加えて引用しつつ⁴¹、次のように述べている。

（前略）私はティツィング氏の集めた諸材料の正確さと、ティツィング氏自身これらの原著から訳出したその翻訳の忠実さに関しては、絶大の自信をもって、ここに、これら興味深い同氏の業績の一部を世に贈る次第である⁴²。

日本の書物をもとにした内容の正確性に信頼を置いていることが分かる。正確な情報の発信という点において、ティツィングとヌヴェーの意向は一致していたと思われる。また、出版に当たって、博物学者・旅行家であるシャルパンティエ・ド・コシーニ（Joseph Francois Charpentier de Cossigny de Palma, 1730–1809）による *Voyage au Bengale* (1799)（『ベンガル航海記』）からの抜粋がヌヴェーによって追加されている。コシーニはベンガルでティツィングと会い、ティツィングが日本を離れる際に手に入れた「土砂」の一部を譲り受けたという。コシーニはその「土砂」を対象に拡大鏡による観察、濃硫酸、硫酸性酒石酸をかけたときの反応、凸レンズの焦点に当てる実験を行い、それぞれの結果を詳細に記録している⁴³。

たとえ仮にこの粉末の性質が単純なものにせよ、あるいは複雑なものにせよ、日本人によれば、それはもし証明されるならば、本当に素晴らしい効果を生むものである。私はその実験を試みたくてたまらなかった。そこで、すでに冷たくなった死体に、土砂を二回ないし三回分の量を用いて試してみた。そして、それらの死体がそれまでと同じように硬かったということを告白せねばならない。しかし、真実のところ、私のあらゆる努力にもかかわらず、硬直した関節は、むなしく十五分、三十分待っても、また六十分待っても、柔らかくならなかったということを述べざるを得ないのである。

そのうえ、私は土砂をみんな使ってしまったけれど、善悪いずれにせよ、まったく何らの効目も経験できなかったと断言することができる。土砂は匂もなく、またもつとも味のない砂同様、何の味もないことを知った。土砂の効目が何であっても、私の意見では、効目はそれ自体に存するというより、むしろ日本人の迷信のある点に帰すると思うのであるが、ティツィング氏はこの日本帝国全体を通して高貴な人々や卑賤な者たちが、金持も貧しい者も、それを用いるのが適切な場合にはすべて土砂を買い、使用する、と主張する。そしてこれが、その製法の秘密を独占的に所有しており、また、自分たちだけが持つ鉱物に富む奥まった山に住むある家族にとっては、まさに十分な富の源泉であり、彼らはそこでその薬をつくり、販売するのである。このほとんど神秘的な起源は、この粉末を使用することの起りは、ある宗教的な観念からきているのだ、という私の見解を確証するようにみえるのである⁴⁴。

この内容は、ヌヴェーがティツィングの目指していた「土砂」についての科学的な説明を、

他の人物の手による実験結果を引用することで成し遂げようとした結果だと考える。ここからも、ヌヴーがティツィングと同様に正確で詳細な説明を書籍としてまとめ、ヨーロッパの人々に届けようとしていたことが分かるのではないだろうか。一方、後述する書評の内容から見るに、この追記の内容によって読者へ「土砂」が「非科学的なもの」であるとの印象を強めてしまったことは事実であろう。

英語版の出版者であるショバールは小序にて

長い間にわたって、幕府が守ってきた鎖国制度のもとで、日本国民の歴史、風俗、習慣、芸術、文学などに関して我々が持っている知識に加えて、さらに、この書物に述べるような事柄をも知ることができるならば、それこそ知識欲に燃えた人々にとってはきわめて歓迎すべきことであるに違いない⁴⁵。

と述べ、読者が持つ日本への関心に対して、この本の内容がその需要を満たすものであるとしている。また、日本の政策やオランダ人が外国人を排斥するために吹き込んできたことで困難が生ずるだろうが、イギリス人はそのイギリス魂ともいえる勤勉さと忍耐強さでそれ乗り越えられるだろうと述べている⁴⁶。

ショバールによる英語版において注目すべきは、フランス語版よりも大判になり、かつ挿絵に彩色を施すなど、より視覚に訴えるような形で編集がなされた点である。この英語版の出版に際して付けられた題である *Illustrations of Japan* もショバールによるものであるが、ティツィングの残した英語手稿にはこのような表題はつけられておらず、ショバールがどのような意図をもってつけたのかは明らかでない⁴⁷。しかし、提携していた印刷業者であるルドルフ・アッカーマン（Rudolph Ackerman、1764–1834）が色彩図版の高い技術を有しており⁴⁸、当時の最新の技術を用いた美しい彩色の表現が行われている点には注目すべきだと考える。彼は「商魂逞しい出版人で、彼は大衆の好みを把握し関心を払う編集者を確保していた」と評される人物で、後述する 1820 年代当時の読者層の拡大に伴って人気を博した⁴⁹。ショバールはそういった時勢を踏まえ、ティツィングの著作の内容のうち、鮮やかな図版を前面に出すことで当時の読者の興味を引こうと意図して英語版の題をつけたものと考えられる。

ティツィングは日本の風俗とその歴史について、日本の書物や自らの経験をもとにして、正確で詳細な記述を目指した。「土砂」という宗教的な文化についても迷信だと断じることなく、何らかの科学的な検証ができる可能性を考慮し、慎重に向き合っていた。彼の遺稿を

手にしたヌヴェーもまたその内容の正確性、日本の書物への忠実性を評価しており、正しい日本の情報をヨーロッパに届けるよう意識していた。コシーニの著作を引用し、「土砂」に関する科学的な検証の記録を付け加えたことも、ティツィングの目指した内容に近づけようという姿勢のあらわれである。この本の出版によって、日本についての知識をヨーロッパにもたらすという学術的な価値を求めていたといえるだろう。

一方で、英語版の出版をしたショバールの小序の内容からは、当時のイギリスでの需要に応えようという意識がうかがえる。このフランス語版と英語版の出版者の意識の違いは、ショバールおよび印刷業者であるアッカーマンが 19 世紀初頭のイギリスにおける読者層の拡大を強く意識していたために生じたと考えられる。すなわち彼らは、わかりやすく、関心を引きやすい図版を前面に押し出すことでより広い層の読者へと本を届けようと意図していたと考えられるのである。

3. ティツィングの著作への評価

3-1. 19 世紀初頭イギリスの日本への関心

ティツィングによって記述された日本についての情報は、19 世紀イギリスにおいて誰に、どのような形で読まれたのか。主に『日本風俗図誌』前半の『歴代将軍譜』部分、及び『日本王代一覧』といった日本史に関するものについては、日本に赴任する外交官らに 19 世紀の後半に至るまで広く読まれていたことが木村⁵⁰によって明らかにされている。また、先述したホジソンの記述⁵¹から、『日本風俗図誌』後半部分である「日本における結婚と葬儀の式典」部分に関しても同様に読まれていたことが推測される。

では、ティツィングの著作はそういった限られた読者にのみ届けられたのだろうか。参考書としての役割しかなかったのか。本章では、*Illustrations of Japan* の出版背景や書評誌での扱われ方をもとに、この本がどのように受容されていたのかを考察する。

まず、*Illustrations of Japan* が出版された 19 世紀初頭のイギリスの人々が日本へ向けていた関心について確認する。名前が明らかになっているなかで、最も早く日本に来たイギリス人はウィリアム・アダムズ（1564-1620）である⁵²。1598 年、オランダが東インド方面の市場開拓のために遠征艦隊を編成し、彼はそこに加わった。1600 年 4 月にアダムズの乗ったリーフデ号は日本へ漂着した。その後、イギリスは東インド会社の商館を長崎の平戸に置くが、そこで商業活動ができたのは 1613-1623 年の十年間のみだった⁵³。1623 年以降日英の交易は途絶えていたが、17 世紀にヨーロッパにもたらされた清の茶は、イギリスでは特に人々の好みに合い、生活の必需品になった。イギリス政府は清国よりも安く茶や生糸が手に入り、かつ国産毛織物の市場にもなりうる日本に改めて注目するようになる⁵⁴。1803 年には、イギリス東インド会社の商船フレデリック号が途絶えていた貿易の再開を求めて江戸湾に来航した。交渉は失敗に終わったが、5 年後にはイギリスの軍艦フェートン号がオランダ船と偽って入港する事件も起こった⁵⁵。オランダ本国の弱体化に乗じてオランダの植民地の一部を勢力下に入れたイギリスは、オランダ東インド会社の日本商館をも支配下に置こうとしたが、これは失敗に終わっている⁵⁶。1814 年にナポレオンがエルバ島へ幽閉され、ヨーロッパの戦乱が落ち着いたことで、イギリス勢力下にあったオランダの植民地は返還された⁵⁷が、その後もイギリス東インド会社は清国との貿易を続けながら日本との貿易を望んで複数回来航していた⁵⁸。

19 世紀初頭のイギリスの人々は、日本貿易による利益を期待し、関心を高めていたとい

えるだろう。こういった背景は、木村が明らかにしたように、外交官などがティツィングの著作を日本についての情報を得る参考書として読んでいたことと合致する。

とはいえ、日本への関心が外交的な実利にしか向いていなかったわけではない。ヨーロッパ全体で見れば、エンゲルベルト・ケンペル（Engelbert Kämpfer, 1651–1716）による『日本誌』が発表されて以降、日本への関心は高まっていた。イギリスにおいてもこのケンペルの著作は注目を集めた⁵⁹。彼は「実際に日本で過ごした経験を持つ最初の著者」で、滞在時期がオランダ人使節の江戸参府と重なっていたこともあり、日本の内情について記述することができた。また、「日本の宗教について多種多様な宗教的伝統の存在などを現実的に描写した」ため、19 世紀初頭に至るまで日本についての主要な参考文献として位置づけられた⁶⁰。こうして近世には日本のさまざまな側面がヨーロッパ人の目にさらされ、知識人の議論の的となっていた。啓蒙時代のヨーロッパは、他の文化に強い興味を持っており、日本人の宗教と社会構造は、ヨーロッパの知識人の関心を集めた⁶¹。トムセンは 17 世紀から 19 世紀のヨーロッパ人の日本理解について、「どれほど多くの本や旅行記—実際の見聞に基づくものもあれば架空のものもあった—が提供されても、日本について文章と絵の両方でもっと知りたいという欲求が常に存在していたように思われる」と述べている⁶²。つまり、イギリスの読者のなかにも、実利的な側面からでなく文化的な興味から日本に関する情報を求めていた人々がいたと考えられるということである。

3-2. 19 世紀初頭イギリスにおける読者

ティツィングの著作が刊行された 19 世紀初頭において、読み書きのできた読者とはどのような人々だったのだろうか。木村はティツィングの著作が読まれた時期について、広まっていくのは 1830 年代以降、19 世紀の終わりまでだという見解を述べている⁶³。したがって本来はティツィングの著作の読者を分析するためには 19 世紀全体にわたってのイギリスの読書文化について述べるべきであるが、紙幅の都合により、本論文では出版当時の編集者、及び後述する書評の執筆者が想定していた読者層として、1822 年前後に限定して検討する。

18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて、ヨーロッパ諸国はフランス革命の影響を受け、基礎教育の目的と組織をめぐる激しい論争の中にあつた。論争の主題は教育を与えるか否かではなく、いつどんな教育を与えるべきかということだった⁶⁴。ヴィンセントは

大衆を教育することは本質的に間違っており、兵士や労働者になると決まった人びとが、読み書きできるよりもできないほうがよいと真面目に論じることは、十九世紀にはもはや不可能になった⁶⁵。

と述べている。啓蒙思想に基づき、すべての子どもが学校に通い、どの教室でも同一の授業を同一の方法で受けられることが教育機関として目指すべきものとされた⁶⁶。

とはいえ、イギリスにおいて公的な学校制度が運営されるようになるのは19世紀の最初の四半世紀を過ぎてからである。1833年に国が教会学校への補助金交付を開始し、1846年にはそれらが視察の対象になった。基礎教育が全国へ行き渡るのは1870年、義務化されるのはさらにその10年後のことだった⁶⁷。つまり、ティツィングの著作がロンドンで刊行された1822年は、イギリス国民に読み書きのための公的な教育がまだ行われていなかったということである。

学校教育が浸透していたとは言えないが、教会などで教育の機会を得ていた人々はいた。結婚登録簿に署名できないこと、軍隊の徴兵検査や国勢調査の回答に署名できないことを非識字率としたとき、イングランドの非識字率は1800年から1820年にかけて、40%からそれをやや下回る程度に低下したとされる⁶⁸。また、ウェブは19世紀初頭にジョン・フリーマン（John Freemann）という人物によって行われた調査を紹介して、対象の地域及び階級が不明であるものの、国民の3分の2程度が読み書きの能力を有していたとする推定があることを念頭に置くべきだと述べている⁶⁹。これらの調査からは、19世紀初頭のイギリス国民全体のうち6割程度が読み書きの能力を有していたのではないかと推察される。読み書きできる者とできない者は完全に分離して存在していたわけではないが、その分布には様々な面で偏りがあった。階級による教育の機会の差だけでなく、たとえば職業や地域である。労働者のなかでも、男性の職業集団、とりわけ都市の熟練工たちは19世紀初頭までに確実なリテラシーを達成しており、他の職業分野がそれに追いつくのはその後数十年を要したとされる⁷⁰。また、男女間の教育の差も見られた。上流階級、中流階級では男女双方への読み書きの教育が確立しており、夫婦間で平等だったが、それより下の階級ではそうではなかった。先述した熟練工たちの妻も、19世紀初頭時点では読み書きの能力で劣っていたという⁷¹。

読み書きの能力があったとしても、それが直接読書につながったとは限らない。本を読む

には、本を手に入れる金銭的余裕と読書に費やすための時間が必要だったからである。ここで注目すべきは、19 世紀のイギリスでは書籍が高価であったとしても、それを購入せずに読む方法が存在したという点である。

上流階級の男性たちが読書をする場としては、17 世紀半ばからコーヒーハウスが存在していた。イングランドにおいてコーヒーハウスは、1650 年、オックスフォードに初めて登場し、2 年後にはロンドンにも現れた。18 世紀初頭にはロンドンだけで 2000 軒あったという⁷²。コーヒーハウスにおかれた新聞や雑誌のコーナーは、初期は無料で利用することができ、1730 年ごろから会費制がとられるようになった。1 年に 1 シリングが相場で、オックスフォードには 3 か月ごとに 1 シリング徴収するところもあったとされる⁷³。

その後イギリスのコーヒーハウスは数を減らしていくが、コーヒーにかけられていた輸入税が軽減され、コーヒーの値段が 3 ペニーから 1 ペニーに下がり、さらに節酒運動と結びついた結果として、1817 年にはなお 2000 軒のコーヒーハウスがあった。そのうち 500 軒は付属の貸本コーナーを持ち、2000 冊の蔵書を持つところもあったという。19 世紀のコーヒーハウスは、利用者の大半が労働者階級だったことが特徴的で、一日に 1500 人から 1600 人の労働者が利用していたとされる⁷⁴。

1725 年、詩人のアラン・ラムジー（Allan Ramsay, 1686–1758）がエディンバラで貸本屋（circulating library）を始め、人々は購入せずに本を読む新たな方法を手に入れた。貸本屋は、コーヒーハウスからヒントを得て、会員制度というクラブの運営方法を取り入れたものであった。1740 年ごろにはロンドンにも登場する⁷⁵。17 世紀からあるコーヒーハウスがほとんど男性のみによって利用されていたのに対し、貸本屋には中流階級の女性の利用があった。中流階級の家庭で召使や女中を雇えるようになり、女性が家庭内労働から解放された。その結果余暇を手に入れた女性たちが娯楽を求めるようになり、それを貸本屋が提供したのである⁷⁶。

1821 年の『マンスリー・マガジン』（*The Monthly Magazine*）によると、当時のイギリスには貸本屋が少なくとも 1,500 軒あり、それぞれ平均して 70 人が契約していた。後述する雑誌協会（Magazine Societies）や新聞協会（Newspaper Societies）と異なり、貸本屋の購入する出版物は会員によって決定されるものではなかった。とはいえ 1820 年代のイギリスで、少なくとも 10 万人に定期的な読書を提供しており、臨時的な利用を含めるとさらにもう 10 万人ほどがこの読書の機会を得ていたのではないかと算出されている⁷⁷。

当初、貸本屋は年に 1 ギニーほどの会費を徴収したため、利用者は中流階級を中心とする

読者に限られていたが、1838 年頃にはより下層の階級の読者のために非会員制をとる貸本屋が登場した。そうした貸本屋は、会費の代わりに一冊当たり 1、2 ペンスの見料を徴収した⁷⁸。初期の貸本屋は上流階級、中流階級の読者が中心であったが、18 世紀後半から 19 世紀にかけてより広い階級の読者へと利用が広まったといえる。

そのほかに、10 人程度の会員がお金を出し合って定期刊行物を購入し、回覧する雑誌協会があり、定期刊行物の数が増えるにつれその必要性が高まっていった。19 世紀初頭には 120 もの雑誌が刊行されたなかで、『マンスリー・レビュー』(*The Monthly review*)、『マンスリー・マガジン』、『エディンバラ・レビュー』(*The Edinburgh Review*)、『クォーターリー・レビュー』(*The Quarterly Review*) に加え、異文化や旅行についての雑誌、哲学または神学についての雑誌が主に読まれていたとされる⁷⁹。

以上の点に鑑みれば、1820 年代のイギリスでは、従来の読者層であった上流階級の人々に加え、中流階級、および労働者階級の人々に読書の機会が開かれはじめていたといえよう。

コーヒーハウスや貸本屋によって、本を購入せずとも読むことができるようになった。これによって一冊当たりの値段が大きな問題とならなくなり、印刷の費用の掛かる、絵や図の鮮やかな本が出版できたのである。また、上流階級の限られた人々だけではなく、中流階級、労働者階級の人々にも本が読まれるようになった。ショバール、アッカーマンはこういった背景を把握していたであろうから、*Illustrations of Japan* もこの時代の読者の需要に応えるために工夫して編集されたと考えられる。

3-3. 書評からみる評価

Illustrations of Japan が出版されてから、イギリスではどのような評価がなされたのか。ショバールによる英語版が出版される以前に『日本における結婚と葬儀の式典』及び『歴代將軍譜』についての書評もフランス、イギリス、ドイツで刊行されていた。しかし、本稿では筆者がフランス語、ドイツ語の書評を分析することが困難である点と、読者の広がり进行を考察するという観点から、図版の彩色に力を入れてより広く読まれるよう工夫されたと考えられる英語版の書評を扱うこととする。

本論文で主に扱う書評誌は『紳士雑誌』(*The Gentleman's Magazine*)、『マンスリー・レビュー』、『エクレクティック・レビュー』(*The Eclectic Review*) の 3 誌である。『紳士雑誌』の

初号は 1731 年、印刷職人、無料配達郵便物委員、時事通信記者であったエドワード・ケイヴ (Edward Cave) によって発行された。同誌では、ロンドンで出版される 200 以上の定期刊行物から最も良い論文やニュースなどをまとめる旨が述べられていた。また、重大事件や啓蒙的な論文、議会討論の手短な概要などの掲載も想定されていた⁸⁰。『紳士雑誌』の売り上げは順調に伸び、1739 年には 1 万部、2, 3 年後には 1 万 5000 部に上った。情報が届くのにラグがあるにもかかわらず、スコットランドでもかなりの需要があったという⁸¹。『マンスリー・レビュー』誌は 1749 年にグリフィス (Ralph Griffiths) によって創刊された。この『マンスリー・レビュー』の登場によって書評誌という形態の雑誌が市民権を得るようになったという。1756 年に創刊された『クリティカル・レビュー』とともに、半世紀ほどにわたって優れた模範的な書評誌という地位を維持していた⁸²。正確ではない大まかな数字ではあるが、『マンスリー・レビュー』は 1797 年に 5,000 部ほど、『紳士雑誌』は同年に 4,500 部ほど発行されていることが分かっている⁸³。『エクレクティク・レビュー』は非国教徒、主に長老派が中心となって 1805 年に創刊した書評誌で、1868 年まで続いた。取り上げる内容は宗教に関連するものに限らなかった⁸⁴。

そのほかに、『クォーターリー・レビュー』と『新エディンバラ・レビュー』(*The New Edinburgh Review*) の 2 誌が新たな刊行物として *Illustrations of Japan* を紹介していることも述べておく。『クォーターリー・レビュー』は純潔ホイッグ主義であった『エディンバラ・レビュー』(*The Edinburgh Review*) に対抗する形で、1809 年にトーリー党派のウィリアム・ギフォード (William Gifford) によって創刊された書評誌である⁸⁵。こちらも大まかな数字になるが、1814 年に 1 万 2000 部から 1 万 4000 部、1830 年代には 1 万 1000 部ほどが発行されていたとされる⁸⁶。『新エディンバラ・レビュー』についての詳細は明らかにできていない。『クォーターリー・レビュー』では Topography(foreign)の項目⁸⁷で、『新エディンバラ・レビュー』では voyages and travels⁸⁸の項目で *Illustrations of Japan* が取り上げられている。

次に、*Illustrations of Japan* がどのような読者層に向けた内容だと受け取られていたのかについて、各書評誌の内容から見ていきたい。『紳士雑誌』では、書評の冒頭で次のように述べられている。

我々がある民族の慣習に精通していない限り、彼らと商取引をする適切な方法を知ることが不可能である。相互の嫌悪を伴う間違いと意図せぬ違反行為は永遠に続く。そのためこの種の本は、特に外交に携わる人や商人にとって非常に有益であるばか

りでなく、あらゆる階級の読者の好奇心をそそり、興味を引く⁸⁹。

ここから、日本人との商取引のために日本の慣習をよく知るべきだと考えていること、また異文化についての知識が読者の好奇心の対象であることが分かる。前節までで述べてきたように、イギリスにおける日本への関心の動機として、貿易による経済的な利益と、異文化への興味が存在していたことが確認できる。

どのような人々に読まれたかを考察するためにもう一つ注目したい点は、図版についての言及である。三誌すべてがこれについて取り上げて紹介している。一誌ずつ順に図版についてどのような評価をしていたのか確認していく。『紳士雑誌』は、「この作品は優雅に印刷されている。図版は興味深く、そして精巧に着色されている⁹⁰」と述べている。『マンスリー・レビュー』では次のように述べられている。

ティツィングのコレクションにある日本の絵画や図の原本から彫られたいくつかの優れた図版は、文章を分かりやすく説明し、単なる言葉や異なる部分を次々に説明するだけでは伝えられない特定の情景の全体的な効果についての印象を心へと伝える⁹¹。

『エクレクティック・レビュー』での評価は次のとおりである。

婚姻の儀式を描いた図版は日本の絵画の非常に満足のいく模造品で、作法、服装、そして住宅建築内部の興味深い描写である。建物の鳥瞰図は明瞭だが、葬儀の長い描写はあらゆる点で非常に重要性を欠く⁹²。

このように、*Illustrations of Japan* の図版はその印刷技術の高さと、それが本文内容の理解を助ける興味深い内容であることを評価されている。書評自体の文量が比較的少ない『紳士雑誌』を含む三誌の書評が共通してこのように図版について言及しているということは、この図版が *Illustrations of Japan* の構成要素として重要であったことを示す。書評の執筆者たちには、当時の流行に沿って彩色に力を入れた本であると受け取られていたということであろう。そういった観点から見れば、読者についても、上流階級に限らず当時新たに読者となっていた層、つまり中流階級や労働者階級の人々を含めて想定されていたと思われる。『紳士雑誌』において「あらゆる階級の読者」に向けた内容だと述べられているように、広い読

者層に向けた内容であると判断されていたといえよう。

次に、ティツィングの伝えた日本の風俗がどのように受容されたのかを考察する。『紳士雑誌』の全体的な内容として、本の前半部分の歴史記述よりも後半の文化紹介について多く扱い、内容を列挙している。前述したように、文化の理解が日本人との交流に役立つと考えられたからであろう。一方、「土砂」に関しては「死体のこわばった四肢を柔らかい状態にする力があると偽られた、最も確実ないかさまの医薬の粉⁹³」と簡潔な紹介がなされている。

『マンスリー・レビュー』では、全体を通してティツィングが些細な点に細かく言及していることを不必要であると評価している。歴史記述に関してはそれがよい場合もあるとしたうえで、婚礼と葬儀に関する記述の冗長さに関して次のように述べている。

日本人の婚姻と葬礼の際に行われる儀式は非常に多く、非常に細かく、非常にくだらないので、読者の注意を疲れさせ、その種類の多さに当惑するのと同じくらい、その些細なことにいら立たせられるに違いない⁹⁴。

「土砂」に関する内容はほとんどない。一方で、ティツィングによって「土砂」の発明者として紹介された弘法大師については 344 頁後半から 349 頁までをその説明に割いており、非常に高い関心を寄せていたことがうかがえる。

『エクレクティック・レビュー』は風俗についての長い記述に批判的で、本の後半部分に関して「この特異な国のそれほど興味深くない婚姻と葬儀についての詳細で占められている⁹⁵」と評価している。同誌に掲載された「土砂」に関する記述は次のとおりである。

ティツィング氏は死者の耳、鼻孔、そして口へと土砂を入れることでその効果が出ると聞いた。1783 年、彼はその効果を若いオランダ人の身体に実際に試す機会を得た。[その体は] 以前は木片のように硬かったが、現地の通訳の一人がこの薬を用いたところ、完全に柔らかくなった。しかし、この件にはなにか仕掛けがあったのか、もしくはティツィング氏が適切な薬の入手に失敗したのか、シャルパンティエ・コシーニ氏があらゆる可能な方法で検査と適用をした際、まったく効果がないように見えた。(中略) その成分は秘密であり、その調製は一家族に限定されていたため、薬としての効果は日本人によるいくつかの迷信的な考えと関係している可能性が高いと推測した⁹⁶。

ティツィングの行った実験記録の記述と、編集者によって追記されたコシーニの実験記録を紹介している。ここではコシーニが手にした「土砂」とティツィングが実験に用いた「土砂」が異なる可能性を示し、日本の「土砂」の効果が完全に虚偽のものであるかどうか検討の余地を残しているとはいえ、「土砂」の効果は迷信である可能性が高いとしている。

『マンスリー・レビュー』と『エクレクティック・レビュー』は共通して、婚姻と葬儀に関する詳細な記述について「重要ではない」「取るに足りない」と批判的に評価している。ティツィングによる細かな描写や説明は、読者にとって不要なものであると判断されている。また、「土砂」については概ね「迷信によるもの」という見解で一致しているといえよう。『マンスリー・レビュー』には記述がないが、「土砂」それ自体よりも弘法大師についての紹介を優先していることから、『マンスリー・レビュー』の書評の執筆者は、日本の宗教文化に大きくかかわった人物として弘法大師は取り上げる必要があるが、宗教的な信仰心から用いられる「土砂」とその効果については取るに足らないものであると判断していたのだろう。どの書評においても、ティツィングの目指していたような、異文化に向き合う慎重さは十分に評価されていないと考えられる。

3-4. 書評の内容の分析

知的好奇心を満たすために異文化としての日本の情報を知りたい、という読者にとっては、ティツィングの目指した正確で詳細な記述はときに冗長であり、取るに足らないものであったのだろう。また、「土砂」についてもティツィングのような慎重な検討や考察が行われることなく、根拠のない異国の迷信の一例として扱われた。*Illustrations of Japan* はおそらくティツィングが生前に想定していたよりも広い読者に受容されたが、そのために求められる内容が変化したと考えられる。19 世紀初頭のイギリスにおいて、日本文化という情報が限られた知識人を対象にした学術的な価値を持つものから、より多くの人々の知的好奇心を満たすためのものになっていったという変遷の一端を示すだろう。

おわりに

ティツィングは日本についての情報をヨーロッパに伝えるにあたって、正確性と詳細さを重視していた。また、「土砂」に関して異国の宗教的な文化に関しても迷信だと断じることなく、科学的な検証を行い、日本人にさらなる説明を求めるなどの対応をとっていたことは、彼の異国の文化に対する慎重な向き合い方を示す。事実に基づいた日本についての正しい知識をヨーロッパに届けることが目指されたのである。

書評の内容から、*Illustrations of Japan* は図版が高く評価されていたことが分かる。本書は人々の関心を集めていた異国の情報を届けるものであると同時に、当時の読者層の急拡大を背景に流行していた彩色の美しい本として売れるように意識されたものでもあった。そして、ティツィングの本が日本への関心を持つより多くの人々へ届けられた結果として、正確さや詳細さを必ずしも必要とせず、また望んでいない読者にも受け取られるようになった。

広い読者の獲得によって、かえってティツィングの目指した正確性や詳細さといった価値が注目されなくなってしまったのである。*Illustrations of Japan* は外交官などが日本についての知識を得るための実用的な参考書としてだけでなく、流行に合わせた、人々の知的好奇心を満たす文化的消費財としても読まれていたといえる。

参考文献

〈日本語文献〉

芦田完「朽木昌綱」国史大辞典編纂委員会『国史大辞典 第四卷』吉川弘文館、1984 年、817–818 頁。

ヴィンセント、デイヴィド『マス・リテラシーの時代 近代ヨーロッパにおける読み書きの普及と教育』北本正章監訳、新曜社、2011 年。

科野孝蔵「日本におけるオランダ商館長ティチング」『社会科学論集』47 号、1989 年、167–191 頁。

木村直樹「ティツィングの日本史理解とその受容」横山伊徳編『オランダ商館長の見た日本 ティツィング往復書翰集』吉川弘文館、2005 年、485–506 頁。

コリンズ、A. S.『十八世紀イギリス出版文化史 作家・パトロン・書籍商・読者』青木健、榎本洋訳、彩流社、1994 年。

コリンズ、A.S.『文筆業の文化史 イギリス・ロマン派と出版』青木健、榎本洋訳、彩流社、1999 年。

清水一嘉「四章 貸本屋と読者大衆」松村昌家ほか『英国文化の世紀4 民衆の文化誌』研究社出版、1996 年、71–95 頁。

スタインバーグ、S.H.『西洋印刷文化史 グーテンベルクから 500 年』高野彰訳、日本図書協会、1985 年。

多田實『ホジソン長崎函館滞在記』雄松堂書店、1984 年。

トムセン、ハンス・ビャーネ「17 世紀から 19 世紀の日欧相互理解」ブルーノ・J・リヒツフェルトほか編『異文化を伝えた人々III シーボルトの日本博物館』臨川書店、2022 年、101–124 頁。

沼田次郎『ティチング日本風俗図誌』雄松堂書店、1970 年。

延広真治「馬場文耕」日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典 第五巻』岩波書店、1984 年、116–117 頁。

牧健二『西洋人の見た日本史』弘文堂、1949 年。

松井洋子「ティツィングの伝えようとした『日本』」横山伊徳編『オランダ商館長の見た日本 ティツィング往復書翰集』吉川弘文館、2005 年、421–458 頁。

松方冬子「ティツィングと日本の書物」横山伊徳編『オランダ商館長の見た日本 ティツィング往復書翰集』吉川弘文館、2005 年、459–484 頁。

密教辞典編纂会編『密教大辞典 増訂版』法藏館、1974 年、541 頁。

宮永孝『日本とイギリス-日英交流の 400 年』山川出版社、2000 年。

メイラン、G.F.「メイラン日欧貿易概史」木村直樹ほか訳、松方冬子ほか『十九世紀のオランダ商館 上 -商館長ステュルレルの日記とメイラン日欧貿易概史』東京大学出版会、2021 年、343-514 頁。

横山伊徳編『オランダ商館長の見た日本 ティツィング往復書翰集』吉川弘文館、2005 年。

横山伊徳「出島下層労働力研究序説」横山伊徳編『オランダ商館長の見た日本 ティツィング往復書翰集』吉川弘文館、2005 年、379-420 頁。

蓮體『光明真言金壺集』大坂小島／勘右衛門、宝永 5（1708）年、国書データベース所蔵刊本。

〈外国語文献〉

Boxer, C. R., *Jan Compagnie in Japan, 1600-1850*, The Hague, 1950.

Daniel, A. R., *The English Common Reader: A social History of the Mass Reading Public, 1800-1900*, 2nd. ed., The Ohio State University Press, 1998, (First edition: The University of Chicago Press, 1957).

Ford, J., “Ackermann, Rudolph,” *Oxford Dictionary of National Biography*, 2004, <https://www.oxforddnb.com/display/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-59?rskey=tHYhiT&result=2> 2024/12/17 最終アクセス。

Ford, J., “Shoberl [Schoberl], Frederic,” *Oxford Dictionary of National Biography*, 2004, <https://www.oxforddnb.com/display/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-25450?rskey=9m4x7d&result=1> 2024/12/17 最終アクセス。

Lequin, F., *The Private Correspondence of Isaac Titsingh: volume I (1785-1811)*, Repro-Holland, 1990.

Lequin, F., *The Private Correspondence of Isaac Titsingh: volume II (1779-1812)*, Repro-Holland, 1992.

Lequin, F., “Isaac Titsingh’s Private Correspondence (1783-1812) as the Reflection of an Enlightened ‘Voyageur Philosophique’,” 『東京大学史料編纂所研究紀要』第 17 号、2007 年、1-22 頁。

Sullivan, A., “Eclectic Review, The,” *The Romantic Age, 1789-1836*. Greenwood Press, 1983, p.124-133.

Titsingh, I., *Cérémonies usitées au Japon pour les Mariages et les Funérailles*, Paris, 1819.

Titsingh, I., *Illustrations of Japan*, London, 1822.

Webb, R. K., *The British Working Class Reader 1790–1848; Literacy and Social Tension*, London; George Allen & Unwin Ltd., 1955.

執筆者不明 “FACTS relative to the State of READING SOCIETIES and LITERARY INSTITUTIONS in the United Kingdom,” *The Monthly Magazine*, vol.51, London, 1821, pp. 397–398.

執筆者不明 “List of New Publications. Voyages and Travels,” *The New Edinburgh Review*, vol.2, Edinburgh, 1822, p. 597–598.

執筆者不明 “New Publications. Topography(foreign),” *The Quarterly Review*, vol.26, London: John Murray, 1822, p.547.

執筆者不明 “Review–Titsingh’s Illustrations of Japan,” *The Gentleman’s Magazine*, vol.131, London: R. Newton, 1822, pp. 430–432.

執筆者不明 “The Monthly review, for December, 1822 Titsingh’s Illustrations of Japan,” *The Monthly Review*, vol.99, London, 1822, pp. 337–350.

執筆者不明 “Titsingh’s Illustrations of Japan,” *The Eclectic Review*, vol.17, London, 1822, pp. 324–332.

1 C. R. Boxer, *Jan Compagnie in Japan, 1600–1850*, The Hague, 1950, pp. 135-172.

2 F. Lequin, *The Private Correspondence of Isaac Titsingh: volume I (1785-1811)*, Repro-Holland, 1990.及び F. Lequin, *The Private Correspondence of Isaac Titsingh: volume II (1779-1812)*, Repro-Holland, 1992.

3 松井洋子「ティツィングの伝えようとした『日本』」横山伊徳『オランダ商館長の見た日本 ティツィング往復書翰集』吉川弘文館、2005年、421-458頁。

4 木村直樹「ティツィングの日本史理解とその受容」横山伊徳『オランダ商館長の見た日本 ティツィング往復書翰集』吉川弘文館、2025年、485-506頁。

5 沼田次郎『ティチング日本風俗図誌』雄松堂書店、1970年、479頁。

6 F. Lequin, “Isaac Titsingh’s Private Correspondence (1783-1812) as the Reflection of an Enlightened ‘Voyageur Philosophique’,” 『東京大学史料編纂所研究紀要』第17号、2007年、

2 頁。

7 G.F.メイラン「メイラン日欧貿易概史」木村直樹ほか訳、松方冬子ほか『十九世紀のオランダ商館 上 ―商館長ステュルレルの日記とメイラン日欧貿易概史』東京大学出版会、2021 年、405 頁。

8 科野孝蔵「日本におけるオランダ商館長ティチング」『社会科学論集』47 号、1989 年 169-170 頁。

9 メイラン「メイラン日欧貿易概史」408―410 頁。

10 田保橋潔「イザーク・ティツィングの日本研究」『史学雑誌』第 39 編第 11 号、1928 年（1969 年複製版出版）、1163 頁。

11 横山伊徳「出島下層労働力研究序説」『オランダ商館長の見た日本 ティツィング往復書翰集』吉川弘文館、2025 年、380 頁。

12 芦田完「朽木昌綱」国史大辞典編纂委員会編『国史大辞典 第四巻』吉川弘文館、1984 年、817-818 頁。

13 松井「ティツィングの伝えようとした『日本』」421-458 頁。

14 沼田『ティチング日本風俗図誌』

15 松井「ティツィングの伝えようとした『日本』」426 頁。

16 科野孝蔵「日本におけるオランダ商館長ティチング」『社会科学論集』47 号、1989 年、183 頁。

17 松井「ティツィングの伝えようとした『日本』」426 頁。

18 松方冬子(2005)「ティチングと日本の書物」横山伊徳『オランダ商館長の見た日本 ティツィング往復書翰集』吉川弘文館、2005 年、479 頁。

19 J. Ford “Shoberl [Schoberl], Frederic,” *Oxford Dictionary of National Biography*, 2004, <https://www.oxforddnb.com/display/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-25450?rskey=9m4x7d&result=1> 2024/12/17 最終アクセス

20 沼田『ティチング日本風俗図誌』13 頁。

21 延広真治「馬場文耕」日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典 第五巻』岩波書店、1984 年、116-117 頁。

22 木村「ティツィングの日本史理解とその受容」、486 頁。

23 木村「ティツィングの日本史理解とその受容」、499 頁。

24 木村「ティツィングの日本史理解とその受容」、503 頁。

-
- 25 沼田『ティチング日本風俗図誌』487 頁。
- 26 沼田『ティチング日本風俗図誌』487 頁。
- 27 沼田『ティチング日本風俗図誌』、414-416 頁。
- 28 密教辞典編纂会編『密教大辞典 増訂版』法藏館、1974 年、541 頁。
- 29 蓮體『光明真言金壺集』大坂小島／勘右衛門、宝永 5（1708）年、国書データベース所蔵刊本 17 頁参照。
- 30 多田實『ホジソン長崎函館滞在記』雄松堂書店、1984 年、176 頁。
- 31 多田『ホジソン長崎函館滞在記』239-241 頁。
- 32 松井「ティツィングの伝えようとした『日本』」421 頁。
- 33 木村「ティツィングの日本史理解とその受容」485-506 頁。
- 34 松井「ティツィングの伝えようとした『日本』」421-458 頁。
- 35 松方「ティツィングと日本の書物」459-484 頁。
- 36 沼田『ティチング日本風俗図誌』、414 頁。
- 37 沼田『ティチング日本風俗図誌』、436 頁。
- 38 横山伊徳（2005）『オランダ商館長の見た日本 ティツィング往復書翰集』吉川弘文館、258 頁。
- 39 沼田『ティチング日本風俗図誌』9 頁。
- 40 横山『オランダ商館長の見た日本』322－323 頁。
- 41 沼田『ティチング日本風俗図誌』8-9 頁。引用部分と対応すると思われる箇所は次のとおりである。日本語訳は沼田による。

日本人の祖先、起源はなお厚い疑問の雲に覆い隠されておりますが、キリスト紀元前 660 年以降、多くの内裏の治下に相次いで起った大きな事件について、もらすことなく引き続き記してあるその記事は、現在日本人の間になお強く残っている習慣を解明するのに、有力な光明を与えてくれるものであります。また、それによって、日本人は近代ヨーロッパの諸国民の存在するよりももっと以前に、あるいは彼らがなお極度の野蛮な状態という恥ずかしい首枷のもとにあった時期において、すでに文化をもった洗練された民族であったことが明らかになります。

（中略）現在この瞬間において、ヨーロッパには私以外に、ほとんどヨーロッパに知られていないにもかかわらず、多くの点で十分知る価値のある、この日本国民の風俗習慣についての信頼できる歴史と詳しい記述とをなし得る者はいないということは、明白

な事実であります。

- 42 沼田『ティチング日本風俗図誌』12 頁。
- 43 沼田『ティチング日本風俗図誌』437－438 頁。
- 44 沼田『ティチング日本風俗図誌』438－439 頁。
- 45 沼田『ティチング日本風俗図誌』3 頁。
- 46 沼田『ティチング日本風俗図誌』3－4 頁。
- 47 松井「ティツィングの伝えようとした『日本』」456 頁。
- 48 J. Ford “Ackermann, Rudolph,” *Oxford Dictionary of National Biography*, 2004,
<https://www.oxforddnb.com/display/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-59?rskey=tHYhiT&result=2> 2024/12/17 最終アクセス
- 49 A.S.コリンズ『文筆業の文化史 イギリス・ロマン派と出版』青木健、榎本洋訳、彩流社、1999 年、240 頁。
- 50 木村「ティツィングの日本史理解とその受容」502－503 頁。
- 51 多田『ホジソン長崎函館滞在記』
- 52 宮永孝『日本とイギリスー日英交流の 400 年』山川出版社、2000 年、10 頁。
- 53 宮永『日本とイギリス』32 頁。
- 54 宮永『日本とイギリス』42 頁。
- 55 宮永『日本とイギリス』42－43 頁。
- 56 宮永『日本とイギリス』51－55 頁。
- 57 宮永『日本とイギリス』56 頁。
- 58 宮永『日本とイギリス』58 頁。
- 59 牧健二『西洋人の見た日本史』弘文堂、1949 年、300 頁。
- 60 ハンス・ビャーネ・トムセン「17 世紀から 19 世紀の日欧相互理解」ブルーノ・J・リヒツフェルトほか編『異文化を伝えた人々Ⅲ シーボルトの日本博物館』臨川書店、2022 年、117 頁。
- 61 トムセン「17 世紀から 19 世紀の日欧相互理解」118 頁。
- 62 トムセン「17 世紀から 19 世紀の日欧相互理解」112 頁。
- 63 木村「ティツィングの日本史理解とその受容」499 頁。
- 64 デイヴィッド・ヴィンセント『マス・リテラシーの時代 近代ヨーロッパにおける読み書きの普及と教育』北本正章監訳、新曜社、2011 年、45 頁。

-
- 65 ヴィンセント『マス・リテラシーの時代』46 頁。
- 66 ヴィンセント『マス・リテラシーの時代』47 頁。
- 67 ヴィンセント『マス・リテラシーの時代』50 頁。
- 68 ヴィンセント『マス・リテラシーの時代』14－15 頁。
- 69 R. K. Webb, *The British Working Class Reader 1790-1848; Literacy and Social Tension*, London; George Allen & Unwin Ltd., 1955, p. 21.
- 70 ヴィンセント『マス・リテラシーの時代』26 頁。
- 71 ヴィンセント『マス・リテラシーの時代』24－25 頁。
- 72 清水一嘉「四章 貸本屋と読者大衆」松村昌家ほか『英国文化の世紀4 民衆の文化誌』研究社出版、1996 年、73 頁。
- 73 清水「貸本屋と読者大衆」74－75 頁。
- 74 清水「貸本屋と読者大衆」86 頁。
- 75 清水「貸本屋と読者大衆」76－77 頁。
- 76 清水「貸本屋と読者大衆」76 頁。
- 77 執筆者不明 “FACTS relative to the State of READING SOCIETIES and LITERARY INSTITUTIONS in the United Kingdom,” *The Monthly Magazine*, vol.51, London, 1821, pp. 397－398.
- 78 *The Monthly Magazine*, p.85.
- 79 *The Monthly Magazine*, pp. 397－398.
- 80 A. S. コリンズ『十八世紀イギリス出版文化史 作家・パトロン・書籍商・読者』青木健、榎本洋訳、彩流社、1994 年、272 頁。
- 81 コリンズ『十八世紀イギリス出版文化史』273 頁。
- 82 コリンズ『十八世紀イギリス出版文化史』274 頁。
- 83 A. R. Daniel, *The English Common Reader: A social History of the Mass Reading Public, 1800-1900*, 2nd. ed., The Ohio State University Press, 1998, (First edition: The University of Chicago Press, 1957), p.392.
- 84 A. Sullivan, “Eclectic Review,” *The romantic age, 1789-1836*. Greenwood Press, 1983, p.124.
- 85 S.H. スタインバーグ『西洋印刷文化史 グーテンベルクから 500 年』高野彰訳、日本図書協会、1985 年、346 頁。
- 86 A. R. Daniel, *The English Common Reader*, p.392.

-
- 87 執筆者不明 “New Publications. Topography(foreign),” *The Quarterly Review*, vol.26, London: John Murray, 1822, p.547.
- 88 執筆者不明 ”List of New Publications. Voyages and Travels,” *The New Edinburgh Review*, vol.2, Edinburgh, 1822, p. 597.
- 89 執筆者不明 “Review-Titsingh’s Illustrations of Japan,” *The Gentleman’s Magazine*, vol.131, London: R. Newton, 1822, p.430.
- 90 *The Gentleman’s Magazine*, p.432.
- 91 執筆者不明 “The Monthly review, for December, 1822 Titsingh’s Illustrations of Japan,” *The Monthly Review*, vol.99, London, 1822, p.334.
- 92 執筆者不明 “Titsingh’s Illustrations of Japan,” *The Eclectic Review*, vol.17, London, 1822, p. 332.
- 93 *The Gentleman’s Magazine*, p.432.
- 94 *The Monthly Review*, p.344.
- 95 *The Eclectic Review*, p.332.
- 96 *The Eclectic Review*, p.332.